宇都宮における蕪村の句碑について
―「宰鳥」から「蕪村」へ―

蔡　　麗　文

Ⅰ　はじめに

宇都宮は、百人一首の誕生[1]と深い関係があり、俳句や短歌とも縁の深い地域である。中世から宇都宮歌壇が形成され、僧侶や歌人が多く訪れ、北関東の文化の一中心となった。江戸時代から城下町として栄え、参勤交代や日光東照宮の営造などにより往来も多く、「小江戸」と呼ばれるほど繁栄した地域である。江戸時代の俳諧史における三大高峰のそれぞれ頂上に位置する俳人に松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶が存在し、それら三俳人はともに宇都宮のある下野国と多かれ少なかれ関わり合った存在であるが、その中でも抜きん出て深い謂れがあるのが与謝蕪村である。

摂津国東成郡毛馬村（大阪市都島区）出身の蕪村は、早くに両親を亡くし、故郷を出て江戸の早野巴人[2]に師事し、俳諧などを学んだ。巴人が死去すると蕪村は北関東で十年ほど遊歴し、この間宇都宮の友人宅に居寓したことがあった。

句碑というのは、俳句を刻みつけた石碑で、通常門弟または土地の俳人や有力者によって建立される。故人の徳を偲び、偉業を称えて、年回忌などの機に、その句を詠んだ当地や作者にゆかりの深い地などに建てられることが多い[3]。本稿では、宇都宮で建てられた句碑について、その建立時間、建立者および句碑の内容について調査し、考察を加えた。

今宇都宮市には蕪村の句碑が二つある。宇都宮に蕪村の句碑があるのは、蕪村の人生経験と作品が宇都宮と繋がっているからである。これと同様に、中国でも詩碑が建てられ、詩人とその作品がある特定の地域と結びついた例がある。本稿では中国の「楓橋夜泊」詩碑を例に、中国の詩碑の建立と内容についても考えてみたいと思う。

Ⅱ　蕪村の句碑

宇都宮で蕪村の句碑は、二荒山神社と生福寺の二箇所に位置する。

（１）二荒山神社蕪村句碑（図１・図２）

場　　所：宇都宮市馬場通り１丁目１－１
建 立 者：蕪村顕彰会[4]
建立時間：平成11年11月
碑　　文：鶏は羽にはつねをうつの宮柱（蕪村自筆より引用）

図1　二荒山神社蕪村句碑
（筆者撮影・撮影日：2019年12月15日）

1　下野宇都宮氏５代当主宇都宮頼綱（後の蓮生）は、藤原定家と親交があり、色紙和歌を定家に依頼したものが後の「百人一首」のもととされる。（出典：宇都宮市公式webサイト：百人一首のまちづくり　2021年06月28日更新　最終閲覧日：2021年12月09日 https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kurashi/rekishi/hyakunin/1007440.html）

2　早野巴人（1676年～1742年）：江戸中期の俳人で、下野国那須郡烏山（栃木県那須烏山市）の出身である。

3　加藤楸邨他監修・尾形仂他編（1995）『俳文学大辞典』「句碑」，角川書店，248頁。

4　蕪村顕彰会：丸山一彦（故人）氏が会長をつとめた。平成10年（1998年）５月に設立発起人会を開催し、蕪村の句碑建立を目指して募金活動を始めたのである。句碑の記の撰文者は当時の事務局長成島行雄。句碑作成、寄付募集のため結成されたもの。現在は、解散状態で、活動してない。
宇都宮市が蕪村ゆかりの地であることをアピールするために句碑を建立した事は『蕪村全集　第二巻　月報七』（2001年・講談社）を参照した。

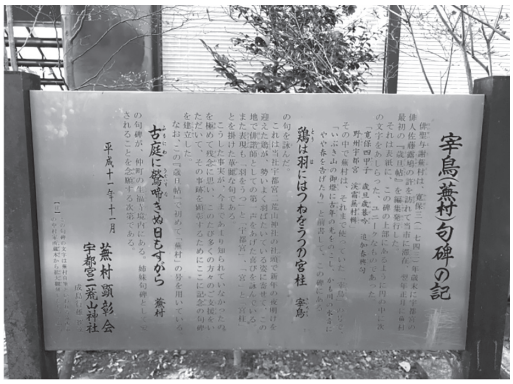

図2　句碑の記
（筆者撮影・撮影日：2019年12月15日）

この句碑に刻まれた句は「鶏は羽にはつねをうつの宮柱[5]」である。句意は、新年を告げる明けの鶏は羽根を、二荒山神社の大宮の柱で勢いよく羽ばたかせながら、今年初めての一声をあげているというものである。

季語は「はつね」で、ここでは初鶏の初音の意味であろう。この句には「宰鳥」と署名され、これは蕪村が「宰鳥」の号で詠んだ最後の句である。

そして、歳旦帖を編む宗匠として独り立ちした第一声として、この句は蕪村が生涯最初の選集である『宇都宮歳旦帖』の巻頭を飾る歳旦三つ物[6]の第一句である。歳旦帖というのは、歳旦開当日の句帖をいう[7]。連歌師や俳諧師が、自分や門弟の発句を集めて刷ったもので、蕪村にあっては、宗匠としてはじめて一家をなしたことの宣言になる。三つ物とは、発句・脇句・第三による三句形式をいう。歳旦帖を出すということは、蕪村がいよいよ俳諧師の師匠として名乗りをあげたということを意味している。

5　尾形仂・森田蘭編（1992）『蕪村全集　第一巻　発句』，講談社,15頁。
6　歳旦三つ物：歳旦開に宗匠が高弟・知友ら三人で巻く、歳旦発句による三つ物をいう。（出典：加藤楸邨他監修・尾形仂他編（1995）『俳文学大辞典』，角川書店，315頁。）
7　加藤楸邨他監修・尾形仂他編（1995）『俳文学大辞典』，角川書店，315頁。

（２）生福寺蕪村句碑（図３・図４）

場　　所：栃木県宇都宮市仲町２－17
建 立 者：蕪村顕彰会
建立時間：平成19年４月
碑　　文：古庭に鶯啼きぬ日もすがら（蕪村自筆より引用）

図3　生福寺蕪村句碑
（筆者撮影・撮影日：2019年12月15日）

図4　「蕪村号誕生の地」碑
（筆者撮影・撮影日：2019年12月15日）

この句碑に刻まれた句は「古庭に鶯啼きぬ日もすがら[8]」である。季語は「鶯」で季節は春である。句意は春がたけてものさびした古い庭には鶯が一日中啼いているというものである。尾形仂氏は『蕪村全集』において、「古庭に鶯が終日さえずっている」と解説され、蕪村の新しい方向を示す春興吟と評価されている。この句は『宇都宮歳旦帖』の巻軸になる句である。鶯の初音は有難がられ珍重されたように、初めて「蕪村」と署名したこの句も蕪村の初音と見做すことができるであろう。

生福寺の参道に蕪村はこの地で俳諧師としての道を歩み始めたという内容の説明があった。蕪村は芭蕉の足跡を尋ね奥州の旅に出た際、寺町（現在生福寺がある仲町）の佐藤露鳩[9]宅に寄寓していた。その折に「宇都宮歳旦帳」を編集、これまでは「宰鳥」と名乗っていたがここで初めて「蕪村」を号し、世に出て行ったと言われている。「宇都宮歳旦帳」では「宰鳥」と「蕪村」が併用され、その後、「蕪村」のみが使用されることになった。

Ⅲ　蕪村と宇都宮

（１）蕪村と巴人

蕪村が宇都宮へ来たことは、蕪村の俳諧の師巴人と深い謂れがある。

大江丸[10]の『はいかい袋[11]』に「江戸内田沾山[12]に倚り、後に巴人宋阿の門人となり、夜半亭といふ。[13]」と述べている。蕪村は江戸ではじめ沾山に学び、ついで巴人の門に入ったことがうかがわれる。

蕪村が入門した巴人は、若くして江戸に出て芭蕉門下の其角[14]、嵐雪[15]に師事し、両師の亡きあとは京都に上って十年ほど滞在した。在京中に宋屋[16]、几圭[17]らの門人を育成した。そして晩年は江戸日本橋の鐘楼（（東京都中央区日本橋本町））のもとで夜半亭[18]を結び、夜半亭一世と称された。このころ、蕪村が夜半亭に同居し巴人の内弟子として入門した[19]。蕪村より四十歳年上の巴人は、蕪村を自分の子のように愛し、身辺の世話をしていたようである。潁原退蔵氏は『蕪村　創元選書[20]』で、巴人と結城、下館等の俳人の交流を論じて、蕪村の関東遊歴が夜半亭門人と深い関係があると指摘した。巴人に入門した蕪村は同門の先輩のみならず、結城、下館等の俳人とも交流があって親しんだようである。

しかし、寛保２年６月、巴人は没した。巴人追善集『西の奥』に、蕪村は次のような追悼句文を掲載している。

宋阿の翁、このとし比予が孤独なるを捨ひたすけて、枯乳の慈恵のふかかりけるも、さるべきすくせにや、今や帰らぬ別れとなりぬる事のかなしびのやるかたなく、胸うちふたがりて云ふべき事もおぼえぬ。

我泪古くはあれど泉かな　東武　宰鳥[21]

このように蕪村は師との永別後の気持ちを述

8　尾形仂・森田蘭編（1992）『蕪村全集　第一巻　発句』，講談社,15頁。
9　佐藤露鳩（？～？）：　江戸時代の俳人。
10　大江丸（1722年～1805年）：江戸中期の俳人。
11　『はいかい袋』：大江丸の俳諧集、当時の俳壇の記録として貴重な資料である。
12　内田沾山（？～1758年）：江戸時代中期の俳人。
13　勝峰晋風（1927）『日本俳書大系　第十巻』「はいかい袋」, 日本俳書大系刊行会, 287頁。
14　其角（1661年～1707年）：宝井其角、江戸前期の俳人、蕉門第一の高弟、江戸座を開く。蕉門十哲の一人に数えられる。
15　嵐雪（1654年～1707年）：服部嵐雪、江戸前期の俳人、其角と並んで蕉門の二壁をなす。蕉門十哲の一人に数えられる。
16　宋屋（1688年～1766年）：望月宋屋、江戸中期の俳人。師巴人の追善集「西の奥」を刊行した。遺句集に三宅嘯山ら編の「瓢箪集」がある。
17　几圭（1687年～1761年）：高井几圭、江戸中期の俳人。後に蕪村の弟子となった夜半亭三世高井几董の父。
18　夜半亭：江戸中期の俳人早野巴人の別号。二世は与謝蕪村、三世は高井几董が継承、三代続いた。
19　栃木県歴史人物事典編纂委員会（1995）『栃木県歴史人物事典』，下野新聞社。
20　潁原退蔵（1943）『蕪村　創元選書』,創元社,73頁。
21　与謝蕪村著・尾形仂・山下一海校注（1994）『蕪村全集　第４巻　俳詩・俳文』，講談社，82頁。

べた。「枯乳の慈恵」とは乳の枯れた祖母が孫に注ぐような深い愛情の意。師を失った「私」の涙は止めどなく溢れ泉のようであったと詠まれたことから、深い哀情がうかがわれる。

また蕪村は巴人三十三回忌にあたる安永３年（1774年）その追善集『むかしを今』を編集し、その序の中で亡き師を回想して、以下のように述べた。

師やむかし、武江の石町なる鐘楼の高く臨めるほとりにあやしき舎りして、市中に閑をあまなひ、霜夜の鐘におどろきて、老の寝ざめのうき中にも、予とゝもにはいかいをかたりて、世の上のさかごとなどまじらへきこゆれば、耳つぶしておろかなるさまにも見えおはして、いといと高き翁にぞありける[22]。

昔、師ら見苦しい家に住み、町中でも閑静であるのに満足していた事を思い出して、「いよいよ高潔な翁」と感嘆した。巴人の市中の清貧にあってなお俗臭を離れた純粋高潔な性格がうかがわれる。さらにその後は以下のように続く。

ある夜危坐して予にしめして曰く、夫俳諧のみちや、かならず師の句法に泥むべからず。時に変じ時に化し、忽焉として前後相かへりみざるがごとく有るべしとぞ。予此一棒下に頓悟して、やゝはいかいの自在を知れり[23]。

「俳諧というものは、必ず師の教えに拘泥するものではない。時に応じて作風を変えて、前例も後のことなども頓着しないで、瞬時にして作句するということが望まれる」と記して、巴人の指導の自由闊達さによって俳諧自在の精神を悟ったことを示された。頴原退蔵氏によると、「後年蕪村があえて師の語勢に倣わず、直ちに蕉翁の幽懐を探って古へに復らうとした識見は、実に巴人の教によって養われたのである[24]」とある。師から習得した俳諧の自在は蕪村の後年の作品の上に少なからず反映されているのではないかと考えられる。

（２）蕪村と雁宕（がんとう）・露鳩（ろきゅう）

巴人の没後、蕪村は、同門の先輩である下総国結城（茨城県結城市）が住んだ砂岡雁宕[25]のもとに身を寄せた。砂岡家は結城の名家で、雁宕の父我尚は巴人と同門であった。清登典子氏によると、「巴人が十年に亘る京での俳諧活動を打ち切って元文２年（1737年）４月に再び江戸にもどることに心を決めたのも雁宕の訪問が大きく作用した[26]」とある。雁宕の誘いを受け入れた巴人は、十年間住み馴れた京都を離れて江戸に帰ってきた。元文２年６月には、夜半亭が定まって、蕪村の入門はその当初である。

我尚、雁宕二代の縁者には俳人が多く、蕪村を結城の宅に連れて帰って、結城一帯の俳人等に紹介するなどした。この時期の蕪村は、下総・常陸・上野・下野一帯の俳人と交流する。その中の一人で、蕪村が親交しその死を悼んで「北寿老仙をいたむ[27]」と題する詩を詠んだ早見晋我[28]は雁宕の叔父にあたる。また、江戸から筑波詣でに来遊の柳居[29]を迎えて俳席を共に

22　与謝蕪村著・丸山一彦・山下一海校注（1995）『蕪村全集　第７巻　編著・追善』，講談社，75頁。
23　同上
24　頴原退蔵（1936）『俳諧史論考』「夜半亭巴人」,星野書店,277頁。
25　砂岡雁宕（？～1773年）：砂岡四良衛門。別号、茅風庵・伐木斎。下総結城の人。巴人門の高足。
26　清登典子（1981）「蕪村と江戸俳壇－関東在位時代の俳環境」国語と国文学,58（８）,至文堂,56頁。
27　「北寿老仙をいたむ」：延享２年（1745）、蕪村は早見晋我の死を悼んで作られた自由体の詩。
28　早見晋我（1671年～1745年）：江戸中期の俳人、号は「北寿」である。
29　柳居（1686年～1748年）：佐久間柳居、江戸中期の俳人、『五色墨』運動の中心的人物。

し、潭北[30]と上野を遊歴するなど各地に足を運ぶ、蕪村風交の模様を知ることが出来る。

蕪村の結城時代について、蕪村は「新花摘」で、

> 余は江戸をしりぞきて、しもつふさいふきの雁宕がもとをあるじとして、日夜はいかいに遊び、邂逅にして柳居がつく波もふでに逢て、ここかしこに席をかさね、或は潭北と上野に同行して処々にやどりをともにし、松島のうらづたひして好風におもてをはらひ、外の浜の旅寝に合浦の玉のかへるさを忘れ、とざまかうざまとして、既三とせあまりの星霜をふりぬ[31]。

と述べている。江戸を離れた蕪村が、結城を中心として漂泊し、俳友らと日夜俳諧に遊ぶことを語っている。

そして、寛保３年（1743）、蕪村は奥羽の旅に出て、奥羽の旅を終えた後、蕪村は翌年の春を、宇都宮を訪れた。当時宇都宮の俳人佐藤露鳩との関係によるものとされている。

宇都宮の露鳩は佐藤氏通称助右衛門、蕪村と同門の俳人、雁宕の娘婿であった。蕪村はそうした縁で露鳩のところに滞留し、日々を送ることとなる。1774年（寛保４年２月21日延享と改元）29歳の蕪村は露鳩一派の後援を得て「歳旦帳」を出版した。

Ⅳ　「寛保四年宇都宮歳旦帖」について

この蕪村の歳旦帖は「宇都宮歳旦帖」とよばれ、紙数丁の仮綴の小冊であるが、版下も全部蕪村の自筆である。蕪村が編集した中で最も古いもので、大正14年、河東碧梧桐が下館の中村家より発見された[32]。『茨城県史研究』によると、この中村家の九代目中村風篁は江戸中期の商人で、醤油醸造を盛んに営み、俳句もたしなみ、蕪村と親交がある[33]。蕪村が『新花摘』（延享２年・1745）において、

> ひたちのくに下館[34]といふところに中むら兵左衛門といへる福者有。古夜半亭の門人にて俳諧をこのみ、風篁とよぶ。ならびなき福者にて家居つきづきしく、方弐町ばかりにかまへ、前栽後園には奇石異木をあつめ、泉をひき鳥をはなち、仮山の致景、自然のながめをつくせり。国の守もおりおり入おはして、又なき長者にてありけり[35]。

と、蕪村が中村家に滞在していたこととその邸宅の繁栄ぶりを表している。風篁は下館俳壇の中心的存在であった。風篁をはじめ、下館の俳人たちと親交を深め、句や絵など多くの作品が残されている。例えば、弘経寺（今の茨城県常総市）には蕪村の墨梅図、楼閣図および山水図など10幅の襖絵が残されている。

この時期の蕪村は俳諧とともに画業も修行し、子漢、朝滄、四明などの画号を用いている。後に俳諧と絵画を大成させていく基礎的な力の蓄積時期と言える。

「宇都宮歳旦帖」の表紙には円形の中に

寛保四甲子
歳旦歳暮吟
追加春興句
野州宇都宮
渓霜蕪村輯

30　潭北（1677年～1744年）：常盤潭北、江戸中期の俳人、其角の門人。
31　与謝蕪村著・尾形仂・山下一海校注（1994）『蕪村全集第４巻　俳詩・俳文』「新花摘」，講談社,60頁。
32　宇都宮市史編さん委員会（1982）『宇都宮市史　近世通史篇』，宇都宮市，652頁。
33　林玲子（1966）「下館藩における尊徳趣法の背景」『茨城県史研究』６号, 茨城県史編さん委員会編集11-25頁。
34　ひたちのくに下館：常陸国下館、現在の茨城県筑西市。
35　与謝蕪村著・尾形仂・山下一海校注（1994）『蕪村全集第４巻　俳詩・俳文』，講談社,71頁。

と五行書に題した。「蕪村」の号について、尾形仂氏[36]によると、蕪村の号は陶淵明「帰去来辞」の「田園将蕪れんとす」に基づくもので、「渓霜」と冠したのは師宋阿を失った孤絶の境涯を暗示させたとある。歳旦帖の春興句に「古庭に鶯啼きぬ日もすがら　蕪村」となり、次に「正朔吟」の題が付され、「いぶき山の御燈に古年の光をのこし、かも川の水音にやや春を告げたり」の前書きを持つ歳旦三つ物が載せられている。歳旦三つ物は、次の三句である。

鶏は羽にはつねをうつの宮柱　宰鳥
神馬しづかに春の白たへ　露鳩
谷水の泡たつかたは根芹にて　素玉[37]

三つ物数組のほかに約三十人の俳人の歳末春興の吟が収められている。宇都宮の俳人のみならず、結城の雁宕、下館の風篁、関宿の阿誰[38]、佐久山の潭北ら巴人の同門や、祇丞[39]・存義[40]など江戸の俳人も句を寄せていた。「宇都宮歳旦帖」は旧号「宰鳥」と共に、「蕪村」の号が初めて使用され、俳諧師としての蕪村の新しい出発を告げるものとして注目に値し、同時に関東在住時代の蕪村の交友関係と俳諧活動が見られる。

蕪村は、関東を歴訪後、京都に定住し、のち夜半亭二世を名乗った。

Ⅴ　中国の詩碑ー「楓橋夜泊」詩碑を例としてー

夜半亭の号は漢詩「楓橋夜泊」に由来するという説がある[41]。中国の寒山寺は、この漢詩と詩碑で名高い。

碑は日本独自のものではなく、中国に起源がある。石の生命の長いことと容易に入手できることから、中国では漢代の頃から始まり、長い間石碑が重んじられてきた。数多くの碑が建立されて今日まで保存され、西安碑林[42]をはじめ多くの碑が完全な形で残されている。

「楓橋夜泊」の詩は次のようなものである。

月落ち烏啼いて　霜　天に満つ。
（月は沈み、烏が啼き、霜気が天に満ちている。）
江楓漁火　愁眠に対す。
（江岸の楓樹の間に、漁り火が点々として、旅のうさにうとうととして眠れぬ目にうつる。）
姑蘇城外　寒山寺。
（蘇州城外の寒山寺から）
夜半の鐘聲　客船に到る[43]。
（打ち出す夜半の鐘の音が、この旅の船にまで響いてくる。）

この詩は、唐代の詩人の張継[44]が安史の乱[45]を避けて呉越の地（現在の浙江省と江蘇省の近く）に遊んだ時の作と言われている。この詩が広く世間に知られて、そのために寒山寺は天下にその名を知られるようになった。

寒山寺は元から江蘇省蘇州市にある臨済宗の仏教寺院である。「楓橋夜泊」の詩碑は明代に「三絶」と呼ばれた蘇州の文人文徴明の筆であったが、たびたび難に遭ううち筆跡がぼやけ

36　与謝蕪村著・尾形仂（2009）『蕪村全集　第９巻　年譜・資料』，講談社,27頁。
37　素玉：安藤興邦（1738年～1815年）：江戸中期の版元、蕪村門の俳人、素玉は号である。
38　阿誰：箱島阿誰（1711年～1772年）：関宿藩御用商人、大名主。巴人門の高弟であり、のち存義門。
39　祇丞：三上祇丞（？～1763年）：江戸中期の俳人。
40　存義：馬場存義（1703年～1782年）：江戸中期の俳人。
41　山下一海（2013）『山下一海著作集　第三巻　蕪村』「蕪村の世界」,おうふう。
42　西安碑林：中国陝西省にあるおよそ3000点の歴代の石碑、墓誌および石刻造像の収集・保存所。
43　目加田誠（1964）『新釈漢文大系　第19巻　唐詩選』，明治書院，751頁。
44　張継（？～？）：唐代中期の詩人、政治家。
45　安史の乱：唐代の中期、玄宗皇帝の晩年に節度史の安禄山と史思明らが起こした反乱。

てきたので、清の光緒年間の学者愈樾の筆によって彫り直された[46]。ことに清の愈樾の筆による詩碑が寒山寺に建てられて以来、その拓本が広く流布して、外国にもよく知られるようになった。

「楓橋夜泊」詩は江戸時代に日本で流行した『唐詩選[47]』と『三体詩[48]』の両方に収録される数少ない詩の一つで、日本人に親しまれている。巴人の句「子規月落烏鳥の声[49]」に描かれた夜明け近く月が落ち烏の声という情景も、「楓橋夜泊」の「月落烏啼霜満天」を連想させた。また、蕪村の句「城外に更行秋や寒山寺[50]」も「楓橋夜泊」詩の利用が認められる。

寒山寺は日本にも存在する。日本の寒山寺は東京都下の青梅市澤井の地に建立される。この寺の由緒は、明治18年（1885）に遡る。時の書家田口米舫氏が中国に遊学した折、姑蘇城外の寒山寺を訪れ、主僧の祖信師より、日本寒山寺の建立を願って釈迦仏像一体を託されたことに始まっている[51]。関東のみならず、関西は大阪府箕面市にも寒山寺が所在する。箕面市の寒山寺は江戸時代より約三八〇年の由緒を持つ禅寺である。その命名は、創建の地である琵琶湖畔を望む膳所[52]は「楓橋夜泊」の詩や観光地として有名な寒山寺の風景とよく似ていたことに由来するという[53]。度重なる戦火と移転を経て、今に至るまで残っている。

中国の寒山寺は張継の詩と句碑によって知られ、王朝が交代し戦火や天災をくぐって廃寺しても、張継の詩によって再建された。この成り立ちには、詩人と蘇州を結び付けている。宇都宮も、蕪村はここで「宰鳥」から「蕪村」へ改号して「宇都宮歳旦帳」を刊行したことで彼と繋がっている。

Ⅵ　終わりに

以上、宇都宮の蕪村句碑について、その建立と内容を具体的に見てきた。

二荒山神社境内にある句碑の碑文は蕪村が「宰鳥」の号で詠んだ最後の句に対して、生福寺の句碑の碑文は「蕪村」の号で詠んだ最初の句である。また、蕪村の宇都宮に来遊については、師匠である巴人や夜半亭の門人と深い関係があったと考えられる。蕪村が巴人の門に入って雁宕と親友になってからこそ、後日雁宕の娘婿露鳩を通し宇都宮に滞在し「寛保四年宇都宮歳旦帖」を刊行することが可能になったのである。

石碑が文化を後世に伝える効果を持っている。中国の「楓橋夜泊」詩碑は時間と国境も越えて、文化を伝える資料となると思われる。

宇都宮市では、蕪村の句が石碑に刻まれ、俳諧に対する理解と俳人への敬意が込められ、俳諧文化の歴史を引き継ぐ役割が果たされている。

46　中国国家文物事業管理局編（1987）『中国名勝旧跡事典第２巻　華東篇』，ぺりかん社，311頁。
拓本の詩の左側に、「寒山寺旧有文侍詔所書唐張継楓橋夜泊詩。歳久漫漶。光緒内午、篠石中丞於寺中新葺数楹、属余補書刻石。兪樾」（寒山寺に旧く文侍詔（文徵明）の書す所の唐・張継の楓橋夜泊の詩有り。歳久しくて漫漶せり。光緒丙午、篠石中丞　寺中に於いて新たに数楹を葺するに、余に属して書を補ひ石に刻せしむ。兪樾）と題記される。

47　『唐詩選』：明の李攀竜が編纂したといわれる唐代の漢詩選集。日本では荻生徂徠が明の古文辞派を重んじ、『唐詩選』を高く評価したことから大流行した。

48　『三体詩』：南宋の周弼が編纂した唐代の漢詩集。日本では室町時代から広く愛読され、江戸時代を通じて多くの注釈書類も出された。

49　丸山一彦ほか（1999）『蕪村の師　巴人の全句を読む―『夜半発句帖』輪読―』，下野新聞社

50　与謝蕪村著・尾形仂・森田蘭校注（1992）『蕪村全集第１巻　発句』，講談社，574頁。
句意：寒山寺の鐘が鳴り響いて紅葉を散らし、姑蘇城外に秋は寂寞として深まってゆく。更け行く秋の寒さを寒山寺の名に利かせた。

51　寒山寺｜おうめ観光ガイド, https://www.omekanko.gr.jp/spot/50501/（参照2021/11/28）

52　膳所：滋賀県大津市の地名。

53　臨済宗妙心寺派　松雲峰　寒山寺　公式サイト,「寒山寺縁起」https://www.minoh-kanzanji.com/about.php（参照2021/12/09）

参考文献

池田俊朗（1979）「夜半亭巴人出自考」連歌俳諧研究, 56号, 45-49頁，俳文学会

宇都宮市史編さん委員会（1982）『宇都宮市史　近世通史篇』，宇都宮市

潁原退蔵（1943）『蕪村　創元選書』,創元社

潁原退蔵（1936）『俳諧史論考』,星野書店

落合雄三（2000）『栃木県近代文学アルバム』，栃木県文化協会

大磯義雄（1966）『与謝蕪村　俳句シリーズ人と作品2』, 桜楓社,

加藤楸邨他監修・尾形仂他編（1995）『俳文学大辞典』，角川書店

角川文化振興財団（1991）『関東ふるさと大歳時記』，角川書店

清登典子（1981）「蕪村と江戸俳壇－関東在位時代の俳環境」国語と国文学，58（8），50－64頁,至文堂

佐竹昭広・山下一海ほか編（1998）『新日本古典文学大系73　天明俳諧集』「夜半亭四部書」，岩波書店

手塚七木（1983）『七木雑記帖』，鬼怒発行所

栃木県歴史人物事典編纂委員会（1995）『栃木県歴史人物事典』，下野新聞社

栃木の文学史編集委員会（1986）『栃木の文学史』，栃木県文化協会

栃木県文学散歩の会（1979）『栃木県の文学散歩』，月刊さつき研究社

とちぎの小さな文化シリーズ企画編集会議（2002）『ふるさとの散歩道　栃木ゆかりの文学を訪ねて』，下野新聞社

中田亮・手塚七木（1982）『栃木県俳句史』，栃木県俳句作家協会

中国国家文物事業管理局（1987）『中国名勝旧跡事典　第2巻　華東篇』,ぺりかん社

蕪村研究会（2000）『蕪村の『宇都宮歳旦帖』を読む―『寛保四年宇都宮歳旦帖』輪読―』，下野新聞社

堀誠（2021）「日本の寒山寺―張継「楓橋夜泊」詩碑に寄せて―」アジア・文化・歴史，12号，1-20頁，アジア・文化・歴史研究会

松浦友久（1999）『漢詩の事典』，大修館書店

松尾靖秋（1958）「蕪村の結城時代―附、元文三年夜半亭歳旦帖―」連歌俳諧研究，16号，57-63頁,俳文学会

松本一夫（2013）『栃木ゆかりの歴史群像　日本史上の人物と地域との関わり』，随想舎

水沼三郎（1999）『吟行案内シリーズ⑰　栃木吟行案内』，俳人協会

宮澤康造・本城靖（2006）『新訂増補　全国文学碑総覧』，日外アソシエーツ株式会社

結城市史編さん委員会（1983）『結城市史・第5巻　近世通史編』, 結城市

与謝蕪村著・尾形仂・森田蘭校注（1992）『蕪村全集　第1巻　発句』，講談社

与謝蕪村著・尾形仂・山下一海校注（1994）『蕪村全集　第4巻　俳詩・俳文』，講談社

与謝蕪村著・丸山一彦・山下一海校注（1995）『蕪村全集　第7巻　編著・追善』，講談社

与謝蕪村著・尾形仂（2009）『蕪村全集　第9巻　年譜・資料』，講談社